



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第二主日B年(2021年1月17日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：サムエル記上 3章 3b - 10、19 節

第二朗読：コリントの信徒への第一の手紙 6章 13c - 15a、17 - 20 節

福音朗読：ヨハネによる福音書 1章 35 - 42 節

## 今日のテーマ：来て、見て、とどまる

三つの朗読から

年間第二主日は、伝統的に『ヨハネによる福音書』の箇所が読まれます。A年は「この方こそ神の子であると証ししたのである」と洗礼者ヨハネが語り、B年でも洗礼者ヨハネが「見よ、神の小羊だ」と証しします。そしてC年では「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしなさい」と、カナの婚礼の席でマリアさまは命じながら、証しします。

ですので、年間第二主日はヨルダン川で洗礼をお受けになられた「神から愛された神の子イエス」が、さらにどういった方であるかを他の人々の証言(証し)から明らかにする意図があります。さらに、そのイエスとの交わりの様子も証言(証し)されます。今日は、「証し」の主日ともいえるでしょう。

第一朗読の冒頭、「サムエルは…主の神殿に寝ていた」(3節b)は印象深いです。神殿に横たわっていた少年サムエルは、神とともにあった。それは、本来自分がいるべき、あるべき場所、状態だったのです。しかし、サムエルはそのことに気がつきません。

第二朗読には、「あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのか」(15節a)と、パウロは問いかけています。わたしたちは、キリストと一つ。それが、本来自分がいるべき、あるべき姿、状態です。しかし、その大切なことに気がつきません。

福音朗読で、従ってきた洗礼者ヨハネの弟子が、「どこに泊まっておられるのですか」(38節)とイエスさまに訊きます。これは単にイエスの宿泊場所を尋ねることだけではなく、本来自分がいるべき、あるべき姿、状態を捜し求める人間の根本的な問いかけではないでしょうか。

## ひとこと

人間は、本来の自分の姿を知りません。自分があるべき場所が分かりません。サムエルは、神殿に横たわっていても、それが自分があるべき場所であると気がつきませんでした。パウロが、あなた方の体がキリストの体の一部であると語っても、わたしたちにはピンときません。「どこに泊まっておられるのですか」(直訳すると「どこにとどまっておられるのですか」)という弟子たちの問いかけは、居場所を失った人間が発する根本的な問いかけです。イエスさまの答えは「来なさい、そうすれば分かる(見る)」でした。弟子たちが見たのは、イエスさまが「つながり、とどまっている」場所です。つまり、御父との交わりの中につながって、とどまっているイエスの本来の姿です。彼らはそこに一緒に「泊まる」、「とどまる」のです。こうして、二人はイエスがどういう方であるかを体験しました。

時々、信仰を抽象的なものに変えてしまいがちなわたしたちです。しかし、「来る」、「見る」、「とどまる」とあるように、信仰はもしかしたら動詞で語るができるのかもしれませんが。イエスさまのもとに来る、イエスさまがなさったことを見る、イエスさまのおそばにとどまる。と、いった具合に。教会、ミサに来る、ご聖体を見る、そしてご聖体をいただいてイエスさまのおそばにとどまる。と、言えるでしょう。だからといって、少年サムエルが神殿で何も横たわっていたことを非難できません。神さまと共にいたからこそ、少年サムエルは安らかな眠りにつけたのですから。



ジョン・シングルトン・コプリー「サムエルによる神の審判の教え」